

Guardian's Sword

常磐

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ユーノとシグナムのお話。

読まれる方は以下の点にご注意を。

※筆者はアニメ版（無印）StS）しか見たことがありません。

漫画版やゲーム版などの設定に関しては、他のSSやNanoha Wikiで見た程度なので

原作と設定が食い違うところがあるかもしれません。

目次

剣と盾	1
スクライア族	19
デンメルングの遺跡	35
その名はムラサメ	50
スクライア族の責任	63
強くなるために	74
二人の剣士	87

剣と盾

——数年前——

「ユーノ……これを、お前に託したい」

その男性は、目の前にいる少年——ユーノ・スクライアにそれを差し出した。

まだ年齢が二桁に達していない子供であるにもかかわらず、大人たちに混じって遺跡調査を行っているユーノは、それがどれほどの物かを理解していた。

（僕なんか、持っていていい物なのかな……）

ユーノの心が大きな不安に支配されていく。

しかし、ユーノは見た。

自身をまっすぐに見つめる男性の瞳を。

ユーノになれば託せるといふ、ユーノへの強い信頼が込められた眼差しを。

その信頼にゆえたい。

そう思ったユーノは、不安を振り払って男性からそれを受け取った。

——現在 新暦70年 ——

時空管理局本局のとある訓練室。

その室内に張られた結界の中で、一人の騎士が剣を振るっていた。

「紫電一閃!!」

その騎士の名はシグナム。

守護騎士ヴォルケンリッターの『烈火の将』。

彼女は己の相棒である『炎の魔剣』レヴァンティンに火炎を纏わせ、正面の敵に必殺

の一撃を叩き込む。

魔剣の一撃は敵のシールドを容易く破壊し、敵を地面に吹き飛ばした。

倒れるその敵の近くには、同じく戦闘不能となった者たちが五人横たわっている。

「残りは四人。さあ、次はだれが来る？」

シグナムは自身の周囲にいる四人の魔導師たちに向けてレヴァンティンを振りかざして言った。

魔導師たちは彼女の気迫に気圧されそうになる自分を奮い立たせ、フォーメーションを組んでシグナムに挑む。

「二氣に来るか、面白い！」

一対四という状況下にあっても、シグナムは笑みを浮かべながら魔導師たちを迎え撃つ。

その様子を、結界の外から見ている少年がいた。

「やっぱりすごいな、シグナムさんは…」

少年の名はユーノ・スクライア。

優秀な結界魔導師である彼は、仲間が模擬戦を行う際に結界を張る役目を任されることが度々あった。

今回もシグナムと、彼女のライバルであるフェイト・テスタロツサ・ハラオウンに呼ばれて来ていたのだ。

二人が結界なしに全力で戦えば、訓練室が壊れかねないのである。

しかし今、この場にフェイトはいない。

先ほどユーノが訓練室にやって来て、いざ始めようとなったところで、義兄であり上司でもあるクロノ・ハラオウンから緊急の呼び出しを受けてしまったのだ。

所属が違うこともあって中々予定が合わず、久しぶりに模擬戦が出来ると思えばこれである。

申し訳なさそうに謝るフェイトを、緊急ならば仕方ないと言って送り出すシグナムは誰の目から見ても残念そうだった。

結局、対戦相手がいなくなってしまうたシグナムは訓練室にいた他の魔導師たちに声

をかけ、一対十の模擬戦を行うことにした。

フェイトと戦えなかったために体力が有り余っていたシグナムは魔導師たちを蹴散らし、そして――

「はああー！」

力強い声と共に最後の一人が斬り伏せられ、模擬戦は終了を迎えた。

ユーノは結界を解除し、空中から降り立ったシグナムに歩み寄る。

「お疲れ様ですシグナムさん。スッキリしましたか？」

「人を欲求不満のように言うな、スクライア」

「でもフェイトと戦えなくて残念でしたよね？」

「……」

凶星だったためか黙ってしまった。

二人の近くでは、シグナムに撃墜された魔導師たちが床に座り込んでいる

そのうち、今回魔導師たちのリーダー役を務めた一人が立ち上がってシグナムに話し

かける。

「模擬戦、ありがとうございます。流石ですね」

「いや、こちらこそ。中々の連携だった」

お互いに対戦相手を称賛する。

しかし、座り込んでいる青年が顔を歪めて言った。

「ちっつ、何が『中々』だ。嫌味にしか聞こえねえぞ」

「おい、失礼だぞ」

苛立ちながら言ったその青年は、先ほどシグナムの紫電一閃をシールドで防ごうとして負けた魔導師だった。

リーダーは青年を窘めようとしたが、青年はさらに怒り出し――

「こつちのランクは良くしてA―だぞ!?!束になったって敵うわけがねえだろ!!」

シグナムの魔導師ランクはSーであり、今戦ったどの魔導師よりはるかに高い。模擬戦であろうと勝敗にこだわる青年は不満を漏らしていた。

しかし、この場でシグナムに対して苛立っていたのはその青年だけだ。

他の魔導師たちは、Sーランクの相手と戦うという貴重な経験が出来たと考えているからだ。

場の空気が悪くなったところで、シグナムが口を開く。

「つまり…ランクが上の私には決して勝てるわけがないと、そう言いたいのか」

「あ？その通りだよ、当然だろ!？」

尚も怒る青年にとっては、ランクの差は絶対であるらしい。

ならば――

「スクライア、こつちへ来い」

「え？」

シグナムはユーノの腕を引き、魔導師たちから少し離れた位置まで誘導する。

そして、ユーノの正面にまわり、彼と向かい合う。

「スクライア、お前のランクは？」

「総合Aランクですが……」

ユーノの答えに魔導師たちは驚いた。

Aランクと言えば武装局員としては隊長クラスが保有するランクだ。

自分たちよりも年下の少年がそれだけのランクを持っているというのだから、驚くのも当然だ。

そして、次にシグナムが言い放った言葉が、彼らをさらに驚愕させる。

「これからお前に紫電一閃を使う。それを防いで見せる」

「「「「「「はあ!」「」「」「」」」」」」

十人全員が一斉に声を上げた。

先ほど青年のシールドを一瞬で砕いた一撃を防げと言うのだ。

いくらAランクといっても、Sーランクとははるかに差がある。

無理に決まっていると誰もが思う中で、ユーノは冷静に答えた。

「…分かりました。概ね予想通りでしたしね」

そう言つて、ユーノはバリアジャケットを身に纏つた。

胸の紋章とマントが特徴的なそのジャケットは、半袖短パンだった9歳までの頃とは違つて長袖長ズボンになっている。

「あんな技防げるわけが…」

青年の言葉を気にかかけもせず、ユーノは右手をシグナムに向けてかざし、掌に魔力を集中させる。

対して、シグナムはレヴァンティンを構えて命令する。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Exploration!》

爆発を意味する応答の言葉と共に、レヴァンティンから空の葉莢がはじき出される。弾丸型カートリッジに圧縮された魔力によって魔法を強化するカートリッジシステムの恩恵とシグナムの持つ炎の魔力変換資質によって、レヴァンティンの刀身は燃え上がる火炎に包まれた。

その名の通り『炎の魔剣』と化した相棒を強く握り、シグナムはユーノに斬りかかる。ユーノは右手に円形の魔方陣を展開して攻撃に備える。

「紫電一閃!!」

「ラウンドシールド!!」

燃え盛る魔剣と、翡翠色に輝く盾が激突した。

周囲の予想に反して、拮抗する剣と盾。

しかし、剣は次第に盾に食い込み始めた。

「はっ、見ろよ！やっぱり無理じゃ…」

罵倒の言葉を発しようとした青年の口は、途中で止まった。

ユーノがシールドを維持させている右手に左手を重ねた瞬間、破壊されると思われたシールドがその輝きを増し始めたのだ。

強化されたラウンドシールドは、レヴァンティンの勢いを押しとどめた。

それに対して笑みを浮かべたシグナムは、自らの剣にさらなる力を込めて対抗する。

「おおおおお!!」

二人の雄叫びが訓練室に響き渡り、炎とシールドの輝きがさらに増す。

それを見守る魔導師たちは余りの眩しさに思わず目を閉じてしまった。

やがて光が収まり、一同は再び目を開く。

彼らの前にいたのは、カートリッジの魔力を使い切り炎の消えた剣を持つシグナム。

そして、崩壊寸前ながらも未だにシールドを保っているユーノの姿だった。

ユーノはシグナムの一撃を耐え抜いたのだ。

「流石だな。なのはに全力でなければ抜けないと言わせただけのことはある」

「はあ、はあ…そ、それはどうも」

どこか嬉しそうに笑いながら言うシグナムに、ユーノは息を切らしながら答えた。
防いだとはいえ、やはり紫電一閃は辛かったらしい。

そんな二人の会話を聞いて、魔導師たちはどよめき始める。

「なのはって、まさか教導隊の高町なのはのことか?」

「あの高町が全力を出さなきゃ突破できないって?」

「マジかよ…」

驚くべき事態の連続に混乱する一同。

その中で先ほどから黙りこくったままの青年に、シグナムが話しかけた。

「見たか? Aランクの少年が、Sーの私の一撃を防ぎ切ったぞ?」

「う、うう…」

「私から言わせれば、ランクなど他人につけられただけのただの目安に過ぎん。技術や努力、本人のやり方次第で覆すことが出来るものだ」

ランクに縛られる必要などないと、そう言い切るシグナムに青年は反論できなかつ

た。

そしてシグナムの背後では、ユーノが魔導師たちに囲まれ矢継ぎ早に称賛や質問を受けていた。

その後、魔導師たちが解散し、ユーノとシグナムは本局内にあるトレーニングルームに来ていた。

ユーノの職場である無限書庫は内部が無重力状態になっている。

無重力の中に長時間いると、骨が細くなったり筋肉が退化するなどして人体が弱くなってしまう。

そのため無限書庫に勤務する者には、定期的なトレーニングが義務付けられるのである。

元々、ユーノは模擬戦が終わった後にトレーニングを行う予定で、模擬戦のために一日予定を空けていたシグナムは彼に付き合う形でここに来ていた。

その日の分のトレーニングを終えたユーノは、シグナムと一緒に部屋の壁際にあるベンチで休憩していた。

「はあ、さつきは疲れました…」

「すまんなスクライア。どうしてもあの男の考え方を正してやりたくてな」

「その後が大変でしたよ。なのはの全力でなきや抜けないっていうのは本当なのかとか、防御魔法を伝授してくれだとか…」

称賛されるのは嬉しかったものの、多人数に囲まれたのは堪えたようだ。

汗をタオルでふき取りながらそう言うユーノを、シグナムは観察するように見つめる。

「な、何ですか?」

「いや、思っていたよりも鍛えられていると思ってな」

タンクトップ姿であるため、肩から露出しているユーノの腕には、細いながらも確かな筋肉があった。

「トレーニングは義務ですし、たまに行く遺跡調査もかなり体力を必要としますからね」

シグナムからの視線に少し恥ずかしがりながらユーノが答える。

管理局に来る前、ユーノはスクライア族の一員として古代遺跡の調査や発掘をしており、現在も稀にはあるが調査に行くことがある。

「体力があり、補助系の魔法も優秀か…あとは攻撃面が充実すれば、戦闘魔導師としても十分なのだがな」

「攻撃魔法は得意ではありませんからね…」

結界魔導師という名の通り、ユーノは結界魔法を中心に防御や回復といった補助系の魔法を得意としている。

一応基本的な射撃魔法や、防御・拘束魔法を応用した攻撃手段は持つものの、単純な攻撃力や破壊力に関しては戦闘専門の魔導師に劣っているのは事実だ。

「攻撃に特化したデバイスを持てばいいのだがな。デバイスを持つ気はないのか？」

シグナムは純粹な興味で尋ねた。

仲間内に戦闘魔導師が多いこともあってあまり目立たないが、ユーノにも素質はある。

かつて闇の書事件の中で、ヴォルケンリッターの一人である『鉄槌の騎士』ヴィータと空中戦を無傷で潜り抜けたのがその証拠だ。

そのままにしておくのは惜しいと考えるシグナムに対して、ユーノは苦笑しながら答える。

「期待してもらえないのは嬉しいんですが、僕にはあまり必要ないと思いますよ。僕はあくまで司書ですしね」

ユーノは自分が前線で戦うタイプではないことを理解している。

P T事件にせよ闇の書事件にせよ、彼は基本的に後方支援に徹することで仲間たちを支えていた。

だからこそ、現在は自身の能力を活かせる無限書庫で情報収集という手段で日々戦っている仲間たちを助けているのだ。

「今のままでも僕は十分ですよ」

「そうか…しかし、やはり惜しいな…」

「ははは…」

尚も勿体ないと考えるシグナムに苦笑しながら、ユーノは着替えるために席を立つ。更衣室に向かう途中で、シグナムが声をかけてきた。

「よし、スクライア。今後のトレーニングの予定を教えてください。時間が合えば私も付き合おう」

「え？…なんでまた…」

予想外の発言に戸惑うユーノ。

対してシグナムは笑顔で理由を言った。

「なに、お前の今後の成長ぶりを見たいだけだ」

「は、はあ…」

どうやらユーノに対するシグナムの興味は、思っていたよりも強かったらしい。

その後、シグナムと別れたユーノは自室に帰った。

疲れが溜まったためか、服はそのままにベッドに仰向けで倒れ込む。

「ふう…あとは攻撃、か…」

トレーニングルームでシグナムに言われたことを思い出す。

攻撃に特化したデバイスがあれば、ユーノも戦闘魔導師として戦える。

まさかシグナムからそこまでの評価を受けていたとは。

無論それは嬉しいのだが、ユーノは少々複雑な心境だった。

ユーノは徐に、懐からそれを取り出した。

黒い表面に金色の紋様が入ったそれは掌に納まるサイズの楕円形で、中心には縦に長く幅の狭い穴が開いている。

日本刀の鑢にも似たそれを見つめながら、ユーノは一人つぶやいた。

「君と話すことが出来たら、なんて言うのかな…ムラサメ」

スクライア族

——地球 海鳴市——

住宅街の中にある一軒の家。

それは管理局に勤める魔導騎士の少女、八神はやたとその家族であるヴォルケンリツターの自宅である。

時刻は既に夕食時。

八神家では久々に家族全員で食卓を囲んでいた。

「こうしてみんなで晩御飯食べるのも久しぶりやね〜」

「いつも何人か欠けちまうもんなあ」

家長であるはやてが嬉しそうに言うのにヴィータがハンバーグを食べながら答える。

全員所属が違うため、中々全員集合とはいかないのである。

「ねえ…なんでみんな私の作ったおかず食べてくれないの?」

「見るからに危険だからだ」

「…ぐすん」

「げ、元気出してくださいシヤマル!」

シグナムの辛辣な一言に涙ぐむシヤマルと、彼女を励ますリインフォースII。

実際、シヤマルの料理の腕はあまりよろしくない。

もとよりうっかり屋などころがあり、焦がしたり調味料を間違えたりなどは日常茶飯事であった。

そんな家族の団欒を眺めているのは、食卓の傍にいる子犬フォームのザファイラである。

人の姿にも変われるが八神家が自分以外女性であること、海鳴市で生活する上では狼形態よりも目立たないかつ燃費がいいという理由から普段は子犬の姿で過ごしている。

主や仲間の守護騎士たちの仲睦まじい様子を見ながら、はやての手作り犬ごはんを食べている。

「そういえばシグナム。今日はフェイトちゃんと模擬戦やったんやろ? どうやった?」

シグナムの昼間の予定を思い出したはやてが尋ねた。

シグナムとフェイトは闇の書事件で対決してからずつとライバル関係が続いており、今回も久しぶりに模擬戦が出来る二人共楽しみにしていたのだが――

「いえ、テスタロツサが緊急の呼び出しを受けたため出来ませんでした」

「ありや、そうなん？」

「ええ。今日は訓練室にいた他の局員と模擬戦した後、スクライアとトレーニングしていました」

「へえ。ユーノも大変だなあ付き合わされて」

「…いや、むしろ私がスクライアに付き合ったのだが」

「」「え？」「」

シグナムの言葉に驚きの声を上げる八神家一同（ザフィーラを除く）。
司書であるユーノが自主的に体を鍛えていることが意外だったらしい。

「無限書庫の無重力空間にいと体が弱るらしく、定期的に鍛えているそうです」

「そうやったんか。ユーノ君ってインドアな印象やったけど、実はムキムキだったりす

るん?。」

「細身ではありませんが、確かに鍛えられていました。今後が楽しみです」

シグナムの説明に納得したはやての問いに、シグナムは期待に満ちた表情で答えた。そんな彼女の様子を、ヴィータは珍しい物を見た風に見た風に眺める。

「ん?なんだヴィータ」

「いや、お前がそこまでユーノに入れ込むのが意外でさ」

「そうか? お前がスクライアを落とせなかったと聞いた時から、多少の興味はあったぞ。お前こそ気にならんのか?」

「そりゃ、悔しかったかって言われりゃそうだけど。あたしは誰かさんほどバトルジャンキーじゃねえしな」

「私はそこまで戦闘好きというわけではないぞ!」

「「「え?」」」

「え?」

「「「……………」」」

(…平和だな)

しばしの静寂の中、食事を終えたザファイラは内心そう呟いた。

——ユーノの自室——

「はあつくしよん!？」

既に夕食を終え、読書を楽しんでいたユーノは唐突にくしやみをしていた。

「ぐすつ…誰か噂してるのかな、なんてね」

鼻をすすりながら一人呟くユーノ。

そういえば何故くしやみすると誰かに噂されているということになるのだろうか。

大したことではないが妙に気になった疑問について調べようと席を立ったところで、ユーノの携帯電話が着信音を鳴らす。

机の上にある携帯を手にとって開くと、メールが一件届いていた。

送信者の名前を確認したユーノは、懐かしむような表情でメールを開いた。

—— 数日後 時空管理局本局 ——

予定が空いていたため、その日もシグナムはユーノのトレーニングに付き合っていた。た。

合流した時からユーノはどこか上機嫌であったため理由を尋ねると——

「先日、友人からメールが来たんですよ」

「友人…なのはたちとは別のか？」

「ええ。アレックス・スクライアといって、その名の通り僕と同じスクライア族なんです」

アレックス・スクライア。

ユーノよりも四つ年上で、遺跡調査の際は彼とよく行動を共にしていた。

ユーノが無尽書庫に勤め始めてからも、時折連絡を取っていた相手である。

「近いうちに新しく発見された遺跡の調査をする予定らしくて、たまには帰って来て一緒にやろうって誘ってくれたんですよ」

スクライア族は古代遺跡の発掘、調査を生業とした流浪の部族である。

かつて海鳴に散らばったジュエルシードも、ユーノが現場指揮をとって発掘したロストロギアである。

「それで、スクライアは参加するのか？」

「ええ。里帰りも出来ますし、有給のいい使いどころですしね」

「ふむ…」

少々考え込むシグナム。

ちなみに現在、彼女はトレーニングウェアを着てアドミナルベンチというトレーニングマシンで腹筋運動中である。

体を倒すたびにトレーニングウェアを膨らませている彼女の胸が強調され、思春期真っ盛りなユーノは顔を真っ赤にしながら必死に視線を逸らしている。

そんな彼に気づいているのかいないのか、シグナムはしばし考えた後に言った。

「スクライア…良ければ、私も同行していいか？」

「え!？」

意外すぎる申し出に驚くユーノ。

シグナムは特に遺跡好きだとか、宝探しに興味があるというわけではない。

むしろ、シグナムの興味の対象はユーノの方だ。

ユーノが所属している無限書庫は、膨大な蔵書を整理し切れずろくに機能していなかった。

そのためユーノは各部署からの情報検索依頼に加え、書庫内の整理・探索作業を行っており、仲間内でもかなり忙しい方だ。

そのため時折プライベートで仲間が集まる機会があつてもユーノが参加できないことが多く、またシグナムの所属が航空武装隊であるため無限書庫に依頼をする機会がほとんどない。

以上の理由からユーノとシグナムが会う機会というのは割と少なく、シグナムはユーノのことをあまり知らない。

最近トレーニングを共にするようになってからシグナムのユーノに対する興味が徐々に強まっており、今回の申し出もユーノが遺跡でどのような仕事をするのか気になったのが理由である。

「構いませんけど、いいんですか？遺跡といつても何も見つからないかもしれませんよ？」

「構わんさ。私が見たいのはスクライアの方だからな」

「はい!？」

誤解を招きかねない発言であった。

——さらに数日後——

そろつて有給を申請したユーノとシグナムは、管理世界『デンメルング』を訪れていた。

現在は調査対象の遺跡の近くにあるスクライア族の野営地を目指して、森林の中を歩いている。

「無限書庫で軽く調べたんですが、この世界ではミッド式ともベルカ式とも違う魔法体系があったそうです。ただ、千年以上前の大きな争いがきっかけで完全に途絶えてしまったそうです」

「今回調査する遺跡に、その謎が隠されているということか？」
「調べてみないことには分かりませんが、可能性はありますよ」

道中で事前情報を交えて遺跡のことを話すユーノはとても楽しそうだった。

14歳にしては大人びている彼が子供のように笑う姿を見て、シグナムは微笑ましい気分になる。

「楽しそうだな」

「はは、そうですね。久しぶりにみんなとも会えますし」

指摘され、照れながら答えるユーノ。

そうして話しながら進むうちに、二人は森林を抜けて広大な草原に出た。視界の向こうにはいくつものテントが張られている。

スクライア族の野営地に到着したのだ。

二人が草原を歩いていると、野営地の方から一人の青年が現れる。

高い身長と青い髪が特徴的なその青年こそ、ユーノの友人であるアレックスだ。

彼の姿を確認したユーノが、手を振りながら声をかける。

「おい、アレックス！帰って来たよ！」

「おうユーノ！久しぶりじゃ…」

アレックスもユーノに伝えるように手を振り返していたが、突然言葉が途切れ、完全に動作を止めてしまった。

「あれ？どうしたのアレックス？」

訳が分からずユーノが尋ねるが、アレックスは完全に固まっている。

より正確に言えば、ユーノの隣を歩くシグナムの姿を見て、固まっていた。

何事かとユーノとシグナムが顔を見合わせていると、アレックスは唐突に二人に向かって駆け出した。

それは旧友を迎えるというよりは、獲物を狙う獣のような獰猛な走りだった。

ますます訳の分からなくなるユーノだったが、急接近して来たアレックスはユーノの正面で跳び上がり――

「死いねやああああああ!!」

「危なああああ!!」

全力全開、殺意に満ちたドロップキックをぶちかます。

身の危険を感じていたユーノはその場を飛び退いて、間一髪で回避した。

しかし、アレックスはユーノに安息の時間を与えなかった。

着地した直後に体勢を立て直し、すかさずユーノに最接近して胸倉をつかむ。

「ユーノてめえ…『友人も連れて行くから』とか言っておいて、女を見せびらかしに来るとは上等じゃねえか傲慢かコノヤロウ!」

「お、女って…シグナムさんとはそういう関係じゃ…」

「うるせえ! 何だあの絶世の美女は!! 顔よし! スタイルよし! 完璧じゃねえかコノヤロウ!! 管理局の仕事が忙しいとか言ってたくせに、あんな美人の年上彼女作るヒマがあつ

たつてのか!？」

「だ、だから違うって!シグナムさんは本当にただの友人で、たまに一緒にトレーニングしたり…」

「そのトレーニングってのは体を鍛える方かそれとも男女が夜にやる方か後者だったらまだ大人の階段上るにや早いんじゃないかねえかコノヤロウ!!」

「その発想は無理矢理すぎない!？」

もはや是が非でもユーノをぶん殴らないと気が済まないと言った風に暴走するアレックスと、それを必死に押さえ込むユーノ。

そんな二人の姿を見ながら、しかしシグナムは別のことを考えていた。

(私が…スクライアの女…?)

ただ二人で並んで歩いて来ただけだというのに、第三者から見るとそう思われるのだろうか。

そう考えると、なんだか妙に顔が熱くなってくる。

だが、ここで自分まで混乱しては收拾がつかない。

シグナムはゆっくり深呼吸して落ち着き、未だユーノに組み付いているアレックスに声をかける。

「あー、その、いいだろうか」

「だからお前にやまだ…え？なんすか？」

「スクラ…ユーノの言う通り、私は彼の友人だ。あなたの考えているような関係ではない」

シグナムはユーノのことをいつも通りスクライアと呼ぼうとしたが、アレックスもスクライアで紛らわしいのでファーストネームで呼ぶことにした。彼女の説明を聞いて、アレックスは徐々に落ち着いていった。

「…マジですか？」

「ああ、そうだろうユーノ？」

「え、ええ…」

最終確認をするアレックス。

ユーノは突然シグナムからの呼び方が変わって少々戸惑いながらもしつかりと肯定する。

「おいおいどうした？アレックスの叫び声が聞こえたが…」

そこに、野営地の方から新たな人物が現れた。

外見年齢は三十代後半、顎に立派なヒゲを蓄えた男だった。

その男を見たユーノが言った。

「族長！お久しぶりです」

「おおユーノ！着いていたか。で、なんでアレックスに組み付かれてるんだ？感動の再会にしては乱暴では…」

族長と呼ばれた男性は疑問に思ったが、シグナムの姿を見て確信する。

「…ああ、なるほど。ユーノと彼女が恋人関係だと勘違いして暴走したってところか」

「うぐ…」

「全く、メールには友人と書かれてあったんだろうが」

ばつが悪そうな顔をしたアレックスに呆れつつ、族長はシグナムに歩み寄る。

「すいませんな。うちの若いもんが見苦しいところを見せてしまいました」

「いえ、そんなことは…」

ない、と言いたかったが流石のシグナムも言いよどんでしまう。

族長は握手を求めようと右手を差し出しながら、笑顔で言った。

「私はスクライア族の長を務めている、デミオ・スクライア。ようこそ、スクライア族へ」

歓迎の言葉を受けて、シグナムは族長の手を握り返すのだった。

デンメルングの遺跡

スクライア族野営地の中央では、ユーノの帰還祝いとシグナムの歓迎を兼ねた夕食会が行われていた。

既に日は沈み、キャンプファイアの明かりが周囲を照らしている。

ユーノはアレックスを中心とした男連中に囲まれているが、そのうちの何人かはすでに泥酔しており完全に飲み会のノリである。

一方で、シグナムは女性たちと談笑していた。話題はもっぱら管理局でのユーノのことである。

「ふーん。じゃあ、ユーノ君って結構忙しいのね」

「ええ。無限書庫の資料があれば捜査は円滑に進みますから。特にロストログアに関する情報は貴重です」

「でも司書の体制は万全じゃないんですよね？まずそれを整えるべきなのでは……」

「検索魔法をうまく活用できる人間が少ないっていうのが痛いわね」

ユーノの現状を聞かされた女性陣は、主に彼の職場である無限書庫の環境の悪さに対して不満を漏らしていた。

彼女らにとってユーノは弟や息子のような存在だ。

そんな彼が九歳の時に部族を飛び出して以来厳しい職場環境に身を置いているとなれば、心配にもなるだろう。

(これが、ユーノの家族か)

それが女性陣を見たシグナムの感想だった。

ユーノには生みの親がいないと以前聞いたことがあったが、彼を心配している家族は確かにいるのである。

そうして話しているうちに、族長のデミオがシグナムに歩み寄って来た。

「楽しんでますかな?」

「ええ、とても」

「それはなにより。遺跡調査は明日ですし、今夜はゆっくり休んでください」

「ありがとうございます。しかし、よろしいんですか？私が調査に参加しても」
「構いませんとも。聞けばあなたは優れた騎士だそうで。遺跡では時折、トラップとして傀儡兵が現れる場合もありますからな。戦力が多いに越したことはない」

デミオの言葉を聞いて、シグナムは安心した。

遺跡調査をするユーノの姿を見に来たとはいえ、シグナムは古代遺跡に関しては全くの素人である。

そんな自分が現場にいても役立たずなのではないかとも思っていたが、有事の際に力になれるのなら望むところである。

と、これまで朗らかに話していたデミオの表情が急に引き締まった。

それを見て、おのずとシグナムも気を引き締めて彼の話を聞く。

「つい先ほど本人にも聞きましたが、ユーノはかなり厳しい仕事をしているようですね」
「…ええ」

「ユーノは昔から周りのことを第一に考える優しい子です。しかし我慢しがちというか、自分の辛さを周りに隠そうとするんですよ。小さいころから大人に混じって行動して来たからでしょうな…まだまだ子供だというのに、自分は泣き言を言っただけない

と、そう考えているのでしよう」

「それは…」

シグナムにも思い当たるところはある。

ユーノが無限書庫で激務に励んでいるのも、検索魔法を最も上手く扱えるのがユーノ自身であるからこそ、書庫のあらゆる業務において彼が先頭に立って行動しているからだ。

子供の身ではかなりの苦労だろうに、彼は仲間の前では気丈に振る舞っている。

自分たちが模擬戦の際に結界を頼めば、貴重な空き時間であつても喜んで引き受けてくれる。

それが嬉しくもあり、同時に申し訳なくもあつた。

シグナムがそう考えていると、デミオは真剣な表情のまま、頭を下げて言った。

「よければこれからも、ユーノのことを見てもらえませんか？そして、あの子が辛そうにしていたら、支えてあげてほしい。あの子は、他人に頼るのは苦手ですからな」

「…無論です。彼は私の…友ですから」

デミオからの申し出に、シグナムは笑顔で答えた。
対してデミオは晴れやかな表情で、感謝の言葉を返すのだった。

「しつかし本当に美人だなあシグナムさん。本当に友達か？それで満足かお前は？」

「しつかいなアレックスも…」

「あ、そういやユーノ。お前、管理局に友人って何人いる？」

「え？付き合いの長い友人なら、なのはにフェイト、アルフ、悪友だけどクロノ。あとは、はやてにシグナムさん、ヴィータにシヤマルさんと…」

「…待て。今挙げた中で男はどんだけいる？」

「クロノだけだけど？」

「女ばつかじやねえかコノヤロウ!!」

「どこに怒ってるのさ!?!」

シグナムとデミオが真面目に話す中、男性陣の方ではそんなやり取りがあったそう
な。

——翌日——

ユーノとシグナムは調査チームと共に、今回の調査の拠点となるベースキャンプにて調査直前の会議を行っていた。

拠点には三角屋根のパイプテントが設置されており、その下の大きなテーブルには遺跡の全体像を描いた概略図が広げられている。

今回のリーダーであるアレックスは調査チームの面々がテーブルの周りに着いたことを確認し、声を上げる。

「ようし、会議始めるぞ。今回調査する遺跡は建造物の構造や配置からして、恐らく古代の都市だったものだ。で、遺跡の状態を見るに推定でも千年以上前の物：分かるか？この遺跡を調べりゃ、長らく謎とされてきたこの世界独自の魔法文明に関して分かるかもしれないねえってことだ」

アレックスの言葉を受けて、チームの面々はおお、と声を上げる。

シグナムが隣に立つユーノをチラリと見ると、声こそ上げていないが明らかにワクワクしている。

古代の謎が解けるとなれば、遺跡調査を生業とするスクライア族が期待に胸を躍らせるのも当然だ。

「まあ気持ちは分かるが落ち着けて。で、今回は久々に帰って来たユーノの他に、特別ゲストが一人！古代ベルカ式の騎士、シグナムさんだ！ハイ拍手！」

アレックスの異様なテンションに引つ張られるように調査チームがシグナムに拍手を送る。

管理局の武装隊とは明らかに異なるノリに内心戸惑うシグナムであった。

紹介の後、調査を始めるにあたり班分けが行われた。

リーダーとして拠点に待機し、各班に指示するアレックスを除く調査チームのメンバーは地上の探索を行うために三つの班に分けられた。

そして、ユーノとシグナムは――

「ユーノとシグナムさんには第四班として、地下の調査をやってもらいたいんだ」

「地下？」

「概略図で言や……」こだな

アレックスはテーブル上の概略図の最北端、拠点側から見て遺跡の最奥地点を指さした。

「事前にサーチャーを使って簡単な探索をしたんだが、ここに地下に通じる入口が見つかってな。ただ地下の構造までは把握し切れなかったし、トラップの可能性があるから大人数で入るのはリスクがでかい。まず二人に入ってもらって、必要に応じて他の班を送り込むプランだ。行けるか？」

「……いいの？一番おいしそうなところらせてさ」

「帰還祝いに譲ってやってんだよ。ありがたく受け取れ」

そんな会話の後に、ユーノとアレックスはニヤリと不敵に笑う。
性格こそ違うが似た者同士なのかもしれない。

「シグナムさんもいいですか？」

「ああ。もとよりこちらは素人だ。そちらの判断に従おう」

「おっし！じゃあ張り切って行くぜ！」

アレックスの言葉によって会議の終了が告げられ、いよいよ遺跡調査が始まった。

三つの班はそれぞれの担当エリアに向かい、ユーノとシグナムは地下への入口に向かって遺跡の中を進んでいく。

広大な遺跡の中には住居と思しき建造物が点在しており、道端には小さな石像が置かれていた。

地球における地蔵のような石像だったが、どことなく河童に見える。

当時の住人たちが祀っていたものだろうか、とユーノは頭の中で考察しながら歩いていた。

そうして遺跡を見回しながら進んでいると、遺跡の最奥にある一際大きな建造物の前に到着した。

建造物の正面側はほぼ倒壊しており、ガレキの山の向こうにはアレックスから聞いていた地下への入口が見える。

『こちら第四班、例の建造物の前に到着した。これから内部に向かうよ』

『こちらベースキャンプ、了解だ。気い付けていけよ』

「行きますよ、シグナムさん」

「ああ、頼りにしてゐるぞユーノ」

念話で現状をアレックスに伝え、ユーノはシグナムと一緒に入口へと入っていった。ユーノはサーチャーを使って地下の内部構造を探索したが、トラップの類は確認されなかった。

今は周りに魔力の光球を浮かせて照明にしながら通路を進んでいる。

しばらく進んでいると、ユーノは通路の壁にいくつも描かれている壁画を発見した。

壁画には、怪物の群れが大勢の人々を襲う様子や、龍を従えた戦士が怪物と戦う様子が描かれていた。

「恐らくこの世界には強大な魔力を持った生命体がいて、この遺跡の住人たちと敵対していたんでしょう」

「この戦士、剣を持っているように見えるな」

「ええ。魔法体系としては、古代ベルカに近いものだったのかもしれない」

ユーノとシグナムは壁画の内容から、かつてこの遺跡で起きた出来事を考察していた。

別の壁画には人に近い姿のものや巨大な虫のようなもの、植物のようなものなど様々な姿の怪物が戦士たちに倒されていく様子が描かれている。

そして通路の奥には、一際大きな壁画があった。

空を覆い尽くさんばかりに巨大な翼を生やした魔物に、三人の戦士が三体の龍と共に立ち向かっていく様子。

そして三体の龍が武器を手放した戦士たちの下を離れ、天へと昇っていく様子が描かれている。

「この龍が戦士たちに力を貸していたと仮定すれば、この戦士たち…当時の魔導師たちはこの戦いで魔力を失ったのかもしれませんが」

「それが、この世界の魔法体系が途絶えた理由ということか」

「おそらくですが…この先に進めば、もっと分かるかもしれませんね」

そう言つてユーノは、通路の更に奥へと進んでいく。

ほどなくして、二人は広い空間に出た。

床から天井までは数十メートルの高さがあり、巨大な支柱が等間隔に並んでいる。

「ここが地下の最奥か？結局、トラップの類はなかったな」

「そうですね。ロストロギアが保管されていたり、王族の墓だった場合にはセキュリティとしてトラップが仕掛けてある場合もあるんですが…」

トラップがないということは、ここにはロストロギアなどの守られるべきものがないということなのだろうか。

しかしこれだけ手の込んだ遺跡に何もないとはいえない。

そもそも、この地下の空間は何のために作られたものなのか。様々な疑問に思考を巡らせながら、ユーノは地下空間に探索魔法を走らせる。

「…ん？」

すると、地下空間の奥の方にわずかな魔力の気配を感じ取った。

奥へ向かったものの、魔力を感知した場所には一見して何も見当たらなかった。

「ここが何か封印された…？その時の残滓がまだ…」

ユーノは床に手を付き、その場に残っている魔力の正体を探るべく探知魔法を展開する。

しかし、ここで異変が起きた。

その場に残っていた微弱な魔力が、まるでユーノの魔力に反応したかのように気配を強めたのだ。

「ユーノ！」

やや離れた位置にいたシグナムもその気配を感じ取り、急ぎユーノの傍に向かおうと飛び出す。

しかし魔力は瞬く間に広がり、半径十メートルほどの結界となつてユーノを内部に閉じ込めてしまった。

「ユーノ、無事か!？」

「ええ。しかし迂闊でした。まさか探知魔法に反応してここまで増幅されるなんて」
「待っている。この程度の結界など！」

シグナムはレヴァンティンを抜き、結界を破壊しようと振り下ろす。

結界破壊の術式を付加されたレヴァンティンの刀身は結界を容易く切り裂いたが、瞬間に修復されてしまった。

「おそらく結界を作り出している核があるんですよ。それを破壊しないと」

「ちい、最後になってこんなトラップが…」

「…いえ。おそらくこれは遺跡のトラップなんかじゃありませんよ」

ユーノは先ほど地下空間を探索した際に、結界魔法の術式が仕掛けられていないことは確認していた。

つまりこの結界は、遺跡を作った人間が意図的に仕掛けたトラップではない。

「では一体…!？」

シグナムの疑問の声は、途中で止まってしまった。

結界内部の地面を覆う魔力の中から、突然数本の腕が生えてきたのだ。

更にその下から、まるでゾンビが墓の下から這い上がってくるかのように本体が現れ

る。

人に近い体型をしているそれは、しかし全身が暗い紫色に染まっており、頭部にある大きな単眼が不気味にユーノを睨んでいる。

その姿は怪物、あるいは魔物といった呼び方がふさわしいものだった。

「どうやらこれが、壁画に描かれていた怪物のようですね」

その名はムラサメ

自身の目の前に次々と現れる怪物たちの姿を見つつ、ユーノはある仮説を立てた。

かつてこの地下空間でも、壁画の戦士たちと怪物との戦いがあったのだろう。

先ほど感知された魔力は、その戦いの末にこの場に封印された物の持っていた魔力の残滓なのだ。

「まさか、千年以上も残り続けていたとはねっ！」

怪物群のうち、襲いかかってきた一体の攻撃をユーノはその場から飛び退いて避けた。

距離を置き、ユーノは怪物群に向けて魔法陣を展開する。

「チエーンバインド！」

魔法陣から伸びる魔力の鎖が、怪物群を拘束する。

だが、直後に地面から新たに現れた同型の怪物が右手に握った禍々しい形状の剣で鎖を断ち切ってしまった。

ユーノは解放された怪物たちの攻撃をシールドで防ぐも、結界に囲まれたこの狭い空間では飛行魔法で飛びまわることもできず、数で攻めてくる怪物たちに徐々に押され始めていた。

「ユーノーくっ……」

結界の外にいるシグナムは何とか結界を破壊してユーノに加勢しようとするが、結界は先程よりも更に強固になっており、レヴァンティンが容易く弾かれてしまう。

そうこうしているうちに、ユーノはついに怪物群に包囲されてしまった。

焦るシグナムに対して、ユーノは――

「…仕方ない、使うか」

冷静にそう言って、腰のポーチからある物を取り出した。

黒い表面に金色の文様が入った、楕円形のディスク。
それを正面に掲げ、ユーノはその名を呼んだ。

「行くよ……ムラサメ！」

ユーノの声に応えるように、ディスクが光を放ち、宙に舞う。

「まさか、待機状態のデバイス…!？」

その様子を見ていたシグナムがディスクの正体を悟った時だ。

ディスクの中央に空いている細い穴から放たれる光のラインが、ディスクの両面側に別々の輪郭を描き出した。

一方は柄、もう一方は反りのある刀身の形となって、光が集まりそれぞれのパーツを実体化させ、ディスクはそのまま鐔となった。

そして、刀身の周囲にいくつものパーツが出現し、刀身を包むように集まって接続され、刀を納める鞘となった。

デバイスが形作られるのと同進行して、ユーノのバリアジャケットも変化してい

た。

先程まで纏っていたマントが魔力の粒子に分解され、陣羽織を彷彿とさせるロングコートに再構築された。

更に両腕両足に魔力を集め、籠手や脛当てといった防具が追加される。

バリアジャケットを再構成したユーノが、完成された刀型デバイス——ムラサメが納められた鞘を左手で掴み、左腰に提げる。

そのタイミングで、剣を持つ怪物の一体がユーノに斬りかかってきた。

ユーノが刀を抜く前に仕留めようとしたのだろう。

しかし、ユーノはバックステップによって怪物の斬撃を回避する。

剣が空振りし、体勢を崩した怪物に向けて、ユーノは素早くムラサメの柄を右手で握り——

「はあっ!!」

抜刀と同時に、怪物の体を両断した。

斬り裂かれた怪物は、不気味な断末魔を上げながら消滅した。

一瞬の出来事に周囲の怪物たちが怯む中、ユーノはムラサメを構えながら静かに言い

放つ。

「さて、次は誰かな？」

挑発的な表情で言われ、怪物たちは剣を手にユーノに斬りかかる。

ユーノは突撃してくる怪物たちの斬撃を時に回避し、時にシールドや籠手で弾くことで防ぎ、ムラサメで反撃する。

その様子をシグナムは呆然と見ていた。

ユーノがアームドデバイスを所有していたこともそうだが、多数の敵を相手に近接戦闘を繰り返していることにも驚きだった。

後方支援を得意とするユーノが刀で戦うことを意外に思うシグナムだったが、ユーノの戦闘を観察しているうちにあることに気づく。

ユーノは自分から敵に攻撃を仕掛けようとはしない。

敵にわざと先制攻撃させてそれを防ぎ、隙の生まれた敵にカウンターを仕掛ける。

しかも反撃の手段はムラサメによる斬撃だけではない。

時には左の掌に小さなシールドを作り、向かって来た敵の顔面に掌打を叩き込んでい

優れた防御力を誇るシールドは、攻撃に使えば強力な打撃武器と化すのである。確実なカウンターを狙い、時にシールドを攻撃に応用する戦闘スタイルは、防御に秀でたユーノらしい戦法と言える。

(しかし、どこでこんな戦い方を…?)

それがシグナムにとって最大の疑問だった。

闇の書事件にしてもその後の模擬戦にしても、ユーノがこのような戦法を見せたことは今までに一度もなかった。

そもそもデバイスは必要ないと言ったのは、他ならぬユーノ自身だというのに。

(なぜ黙っていた…ユーノ)

シグナムがそう思う間に、ユーノはついに最後の怪物と対峙していた。

怪物が振り下ろした剣を左腕の籠手で防ぎ、その腹をムラサメで貫いた。

怪物はムラサメを引き抜かれると、そのまま地面に崩れ落ち消滅する。

ユーノは周囲を警戒するが、新たな怪物が現れる様子は見られない。

「終わったのか？」

「…いえ、まだのようです」

シグナムの問いに返しながら、ユーノは結界の中心を注視していた。

結界内部に広がっていた魔力が集中し、新たな怪物を形作っていたのだ。

全身が黒色の装甲に包まれ、身長が三メートルはあろうかという巨人の姿をしている。

その胸や肩からは魔力結晶が突き出ており、そこから発せられている魔力が周囲の結界へと流れている。

「どうやらあの魔力結晶が結界の核ようですね」

「ならばヤツを倒せば…」

「とはいえ、かなり硬そうですね。なら…」

「? ユーノ、何を…!?!」

ユーノは突然ムラサメを鞄に納めてしまった。

結界越しでも強大な魔力を感じる相手を前になぜ納刀するのか、シグナムの疑問を無視して巨人が動き出す。

《ヴオオオオオオ!!》

巨人はその巨大な腕をユーノに向かって振り下ろすが、ユーノは横に跳び退くことでそれを回避する。

すかさずチェーンバインドを展開してその腕を拘束したが、巨人は力任せに鎖を引きちぎってしまう。

巨人の攻撃は続くが、ユーノはムラサメを納めたまま防御や回避に専念している。

先ほどまでとは打って変わって防戦一方となっていて、ことをもどかしく思っていたシグナムだったが、ユーノが左手に持っているムラサメの鞘から強い魔力を感じた。

注意して見れば、ムラサメを納めている鞘の装甲の一部がスライドしており、内部にあつたインタークのような機構が露出していた。

鞘はそこから周囲の魔力を吸収・蓄積しているらしい。

《ヴオオオオ!!》

しかし、未だユーノを仕留められない巨人は、両拳に魔力を集中させて一気に振り下ろした。

回避しても魔力の余波を受けると予測したユーノは全力のラウンドシールドを展開して巨人の拳を受け止める。

「くう…!!」

「ユーノ!!」

想像以上に強い衝撃を何とか防いだユーノだったが、巨人はそのままユーノをシールドごと押しつぶそうと、腕に更なる力を込める。

苦悶に満ちた表情でそれに耐えるユーノに、思わずシグナムは声を上げる。

こうなれば力尽くでも境界を破壊しようと、シグナムはレヴァンティンの鞆を取り出し――

「シグナムさん！ボーゲンフォルムはダメです！」

「何故だ！シュツルムファルケンならば…」

「威力が大きすぎます！遺跡が崩落するかもしれません！」

シユツルムファルケンはレヴァンティンの弓形態・ボーゲンフォルムによって放たれるシグナム最強の魔法である。

結界を破壊する効果を有するが着弾時に大規模な爆発が発生するため、その衝撃が周囲にある支柱を破壊すれば、間違いなく天井が崩落してユーノたちを潰すだろう。

「では、どうすれば…」

「大丈夫ですよ。反撃の準備が整いましたから」

ユーノに言われ、シグナムは気づいた。

先ほどまで開いていたムラサメの鞆のカバー部分が元の位置に戻り、インテークを再び隠していた。

鞆の内部には、尋常ならざる量の魔力が内包されている。

苦悶の表情から一変、不敵な笑みを浮かべたユーノはラウンドシールドを展開したまま右手で印を結び、詠唱を始める。

「妙なる響き、光となれ。見えざる力にて、我に仇なす者を縛れ！」

詠唱の直後、巨人の体を球状の結界が包んだ。

ユーノは右手を巨人に向け、その魔法名を叫ぶ。

「封縛結界!!」

その瞬間、結界に包まれた巨人の体がまるで磔にされたかのように動きを止めた。

結界内に不可視の力場が発生し、巨人を封じ込めているのだ。

巨人を捕らえたユーノは、すかさず左腰にあるムラサメの柄を握り、抜刀の体勢をとる。

「…『キリサメ斬雨』!!」

裂帛の気合と共に高速で抜き放たれた刀身には、鞘が吸収していた大量の魔力が圧縮されていた。

鞘によって封じ込められていた魔力は抜刀によって解放され、刀身部から一気に噴射

される。

魔力の噴流は、高圧水流によって鋼鉄すら切断するウォーターカッターのように、巨人の体を封縛結界ごと斬り裂いた。

巨人が真つ二つになる瞬間を見たシグナムは、もう一つの事象に気づいた。

ユーノを閉じ込めている結界の、巨人の背後側の壁が大きく切断されていたのだ。

つまり、先ほどの魔力噴流による斬撃はレヴァンティンすら弾いた結界を巨人諸共斬ったということだ。

驚異的な威力とリーチを兼ね備えた一撃に、シグナムは言葉をなくした。

核となる魔力結晶を破壊され、巨人の体は塵となって崩壊し、結界も消滅した。

ユーノはムラサメの刀身に雫のように残っていた魔力の残滓を刀を振るうことで飛ばし、ムラサメを鞘に納める。

シグナムはユーノに歩み寄った。

「…今度こそ、終わりか？」

「ええ。さつきまでの魔力は感じられません。完全に消えたようです」

「そうか…ユーノ、その刀は一体…？」

ユーノの左手に握られたムラサメを見ながら、シグナムは問う。

「…この刀の名は『ムラサメ』。本当なら、もう使うつもりはなかったんですがね…」

自嘲するように笑いながら、ユーノは答えた。

スクライア族の責任

——数年前——

それは、ユーノがまだスクライア族にいた頃のこと。

ある次元世界で遺跡の調査を終えた夜、ユーノはデミオに呼び出されていた。

遺跡の近くに設置されたスクライア族の野営地の中、デミオのテントに向かう途中のユーノにアレックスが話しかけてくる。

「しかし族長からの呼び出しとはな。何か心当たりあるかユーノ？」

「ううん、何も…調査中に何かミスしちゃったかなあ…」

「それはねえだろ。俺から見てもよく働いてたと思うぜ？」

「うん…ありがとう、アレックス」

アレックスは、今日まで行われてきた遺跡調査においてユーノの働きぶりを最も近く

で見ている人物である。

まだ年齢が二桁にもしていないにもかかわらず、大人たちに混じって遺跡調査を行うユーノにとっては調査チームの中で最も年齢が近いこともあり、親しみやすい相手だった。

話しながら歩いてるうちに、二人は目的のテントの前に到着する。

「じゃ、俺はここで。なあに、たぶん説教じゃねえから大丈夫だって」
「うん。それじゃあ」

ユーノの緊張を解くようにそう言って、アレックスはその場を立ち去った。そして、ユーノは意を決してテントの中に声をかける。

「族長、ユーノです」

「おう来たか。入りなさい」

許可を得て、ユーノは入り口をくぐる。

テントの中には二人の人物が並んで座りながらユーノを待っていた。

(族長だけじゃなく長老まで……一体何の話なんだろう)

テントにはデミオだけではなく、口の周りに立派な白髭を蓄えた長老——フォード・スクライアもいた。

一族が行動する際にその中心に立つ二人の人物が並んで座っている光景を見て、ユーノの体は再び緊張で強張った。

「ほれ、突っ立ってないで座りなさい。茶でもどうじゃ？」

「あ、ありがとうございます」

「すまないな。遺跡調査で疲れているだろうに」

「いえ、大丈夫です族長」

ユーノは二人の前に座り、にこやかな笑みを浮かべるフォードから茶を受け取り、夜中に呼び出したことを詫げるデミオに答えた。

笑顔で接してくる二人の様子から、どうやら説教のために呼ばれたのではなさそうだと分かり、ユーノは少し安堵した。

もらった茶を飲んで喉を潤してから、要件を聞くことにする。

「それで、僕に御用と言うのは…」

「ああ、まず今回の遺跡のことだが…」

デミオは傍に置いていた資料の束をユーノに渡した。

それは、今回スクライア族が発掘した遺跡に関する調査報告・考察のまとめである。

その中にはユーノが自分の担当したエリアについて書いたものも含まれていた。

ユーノが資料に目を通すのを見ながら、デミオは話した。

「実際に調査したお前も分かっているとは思いますが、今回の遺跡は古代ベルカの民が残したものだ」

「この世界は昔、ベルカと親交があったと言われておる。恐らくベルカから移住した者たちがいたのじやろうな」

「遺跡の中では、アームドデバイスのパーツや残骸が多く発見されましたが…」

「うむ。我々はアームドデバイスの研究施設ではないかと考えている」

古代ベルカはベルカ式魔法とアームドデバイスの発祥の世界である。

数百年前に発生した大規模次元震により崩壊したが、他の世界に渡って難を逃れた者たちが存在し、ミッドチルダには古代ベルカを統治していた聖王を祀っている聖王協会がある。

ベルカ式魔法を使う者も希少ながら今も存在しているのだ。

「そして、本題はここからだ」

デミオは自分の背後に置かれていた箱をユーノの前に取り出した。

幅20センチほどのそれは、遺跡で発掘された遺物を保管しておくために造られた箱型のデバイスである。

遺物に応じて大きさを変え、一度ロックをかけると自動防御魔法が起動し、開錠用の術式がなければ開けられないようになっていた。

デミオは箱のロックを解除し、ユーノに中身が見えるようにフタを開けた。

箱の中に入っていたのは、金色の紋様を持つ黒の円盤だった。

ユーノはすぐにそれが何か気づいた。

それもそのはず、それはユーノが遺跡で発見した物だからだ。

「僕が見つけたアームドデバイス…それが何か？」

「確認するが…お前が最初に触れた時、これが発光したというのは本当か？」

「は、はい。すぐに消えてしまいました…」

ユーノは遺跡調査時の記憶を掘り起こしながら答えた。

その円盤は、遺跡の奥に厳重に保管されており、発見されたデバイスの中で唯一万全の状態が残っていた。

それを回収しようとユーノが触れた時、円盤の表面に描かれた金の紋様が淡い光を放ったのだ。

発光は一分足らずで終わり、ユーノは不思議に思いながらも円盤を箱に納め、分析班に回したのだ。

「ユーノ。その発光は恐らくマスター契約の証だ。このデバイス：『ムラサメ』は、お前をマスターに選んだんだ」

「え…!？」

デミオが告げた事実は、ユーノにとって余りにも衝撃的だった。

古代のアームドデバイスが自分を主に選んだ…？

困惑するユーノに、今度はフォードが話しかけた。

「長い間封印状態にあつたムラサメは、お主の魔力に反応して再起動したのじゃ。そしてお主の魔力特性を見定め、マスターとして登録したのじゃよ」

「どうして僕が？ 僕は結界魔導師で、武器を使うような人間じゃ…」

「…いや、結界魔導師だからこそお主を選んだのかもしれないぞ」

「…？ それって…」

「分析班がこのムラサメの機能について調べた。詳しくはその資料に載っておるから、よく読んでおくんじや」

フォードの話聞いて、ユーノは益々分からなくなつた。

何故、結界魔導師である自分をアームドデバイスが選ぶのだろう。

戸惑いながらも、自分の手元にある資料の束を見つめるユーノの前に、デミオがムラサメが入つた箱を置いた。

「ユーノ…これを、お前に託したい」

「…！そんな、無理ですよ僕には！」

ユーノは反射的に拒んだ。

いくら自分が発掘した物だとは言っても、自分には到底扱い切れる物ではない。

「別に、これを使って戦えと言っているのではない。だが私と長老は、これはお前が持つべきだと判断した」

「そんな…マスター登録のことなら、プログラムを書き換えれば…」

「分析班が試みたが、アクセスを拒否されて書き換えは出来なかったそうだ」

「古代ベルカの騎士にとってアームドデバイスは武器であると同時に、己の誇りであり象徴じゃった。故に騎士は契約を結んだアームドデバイスと生涯を共にし、アームドデバイスが主となった騎士の命が潰える時まで共に戦う。ムラサメも同じということじゃろう」

フォードが言ったことはつまり、古代ベルカのアームドデバイスとの契約は主が死ぬまで破られることがないということだ。

その事実を知り、ユーノは愕然とする。

「そんな…僕はそんなつもりじゃ…」

ムラサメを発見した時、ユーノの心は歓喜に満ち溢れていた。

自分の発掘したデバイスから、古代ベルカの新たな事実が判明するかもしれない。自分が歴史の謎の解明に貢献出来ることが、嬉しくて仕方がなかった。

だが、発見されたデバイスはあろうことか自分を主に選んだ。

かつて大規模な国家間戦争が行われていた古代ベルカで造られたアームドデバイスは、相手を傷つけ倒すことを前提とした、文字通り『武器』である。

非殺傷設定を備え、魔導師のサポートを主とする近代のミッド式デバイスとは異なる存在だ。

そんな危険な物を所持することは、まだ幼いユーノには余りにも重すぎる。

不安に押しつぶされそうになったユーノの肩に、デミオの手が優しく置かれた。

ユーノが俯いていた顔を上げると、デミオが自分を真っ直ぐに見つめていた。

「よく聞けユーノ。我々のような発掘屋は、自分が発掘した物に責任を持たねばならん」

「責任……」

「遺跡から発掘されるのはお宝ばかりではない。ロストロギアのように大きな危険を孕んだ物だってある。我々は、自分たちが発掘した物が過ちを引き起こさないように常に最善の手を打たねばならぬのだ」

「過ちを……引き起こさないように……」

己のしたことに責任を持つこと。

それは発掘に限らず、人として誰にでも求められることだ。

デミオの言葉を自分に刻み付ける様に繰り返すユーノの頭に、今度はフォードの手が乗った。

「まだ子供のお主には、辛いことかもしれん。じゃがそれは、今後お主が生きていく上で必要なことなのじゃよ」

スクライア族を束ねる者として誰よりも重い責任を負っている二人の言葉に、ユーノの心は徐々に落ち着きを取り戻していた。

「ユーノ、お前は賢い。例え過ちが起こったとしても、お前ならばそれを正すために行動できる。私と長老は、お前を信じている」

ユーノはデミオの瞳に、自分への強い信頼が込められているのを感じ取った。心を落ち着かせ、どうするべきかを考える。

自分が持つていい物なのか、という一瞬生まれた疑問をすぐに否定する。持つていいのか、ではない。これは、主となった自分が持たなければならぬ物だ。

それが、自分の責任なのだから。

決意を固めたユーノは、デミオからムラサメを受け取った。

強くなるために

——現在——

「…これが、僕がムラサメを得た経緯です」

デンメルングの遺跡調査を終えた夜。

ユーノは来客用に張られたテントの中でシグナムと話していた。

話題はもちろん、ユーノの所持しているアームドデバイス・ムラサメについてだった。

「古代のアームドデバイスか…」

「調べたところ、古代ベルカ史の初期に造られたようです」

テントの床に胡坐をかいているユーノは待機状態のムラサメを起動させる。

納刀状態の刀となったムラサメを手に取り、ユーノは鞘の一部を指さした。

そこは、怪物との戦闘中に開いていたインターイクのカバー部分だ。

「この鞘には周囲の魔力素を自動的に吸収して、刀身に圧縮する機能があります…これ、何かに似ていると思いませんか？」

「…カートリッジシステムか」

問い掛けに、特に悩む様子もなく答えたシグナムに、ユーノは正解と告げた。

圧縮魔力によって攻撃を強化するという点は、ムラサメの鞘もカートリッジシステムも共通している。

双方の最大の違いは、ムラサメが戦闘中に魔力素の吸収・圧縮を行うのに対して、カートリッジシステムは予め魔力が圧縮された弾丸を使用することだった。

「ムラサメには鞘の魔力圧縮が完了するまで抜刀出来ないため、数分間武器を封じられるという致命的な欠点があります」

「その欠点を踏まえて、瞬時に圧縮魔力による魔法強化が出来るカートリッジシステムが開発されたということか」

「ええ。加えて、ムラサメには変形機能も備わっています。言うなればムラサメは、シグ

ナムさんたちが使っている古代ベルカ製アームドデバイスのプロトタイプなんです」

武器を模した形状や、ベルカ式魔法の特徴である圧縮魔力による強化機能。

確かにムラサメは、アームドデバイスの基礎と呼べる物だ。

夜天の書の守護騎士であるシグナムには古代ベルカ時代の記憶はないが、自身の相棒であるレヴァンテインの先祖のようなデバイスを目の前になると、感動的な気分になった。

ひとまずムラサメに関しては理解できた。

しかし、シグナムにはもつと重大な謎があった。

「ユーノ…何故、ムラサメのことを黙っていた？あれだけの剣術、一体どこで身につけた？」

遺跡の最奥で遭遇した怪物の群れ。

多勢に無勢な状況だったがユーノはムラサメを操り全ての怪物を撃破した。

あれだけの力を持ちながら何故それを隠していたのか。

シグナムの問いに、ユーノは静かに答える。

「族長からムラサメを託された時、僕はムラサメを使うつもりは全くありませんでした」
「何？」

「刀にしても戦闘にしても僕は素人でしたし、ムラサメには非殺傷設定がありませんから、下手に使って誰かを傷つけるのが怖かったです」

ユーノは海鳴で起きた戦闘でも、仲間同士の訓練でもムラサメを使わなかった。

ムラサメの切れ味は凄まじく、さらに圧縮魔力によつて放たれる斬撃『キリサメ斬雨』は強固な結界さえ容易く斬り裂くほどの威力を誇る。

人間相手に使えば、例えバリアジャケットを纏っていたとしても、ジャケットごと相手の体を両断してしまうだろう。

そんな危険な物を安易に使えるわけがない。

しかしある時を境に、ユーノの心に変化が訪れる。

「なのは、フェイト、はやて…彼女たちは、過去の事件で大切なものを失って…あるいは、失いかけました」

フエイトはPT事件で、自身の母親であるプレシアを救えなかった。はやては、新たな家族になるはずだったリインフォースを失った。そして三年前、なのはは謎の敵の襲撃を受け、生死の境を彷徨った。

大切な友人である彼女たちが悲しみ、苦しむ姿を見て、ユーノは思った。自分にもっと力があれば、違う結果になったのではないかと。

「滅茶苦茶な考えだつてことは分かつてました……でも、居ても立つても居られなかったんです。彼女たちのために、何か出来ることがあつたはずなんだつて……」

例え戦う力を持っていたとしても、それだけでプレシアやリインフォースを救えたかと問われれば、答えはNOだ。

なのはが重傷を負った原因は、襲撃以前になのはが無茶を重ねて疲労していたため。ユーノがなのはを魔法の世界に引き込んだのが原因と言えばそうかもしれないが、それはなのはとフエイトを始めとする仲間たちの絆の全てを否定することになる。

過去に起きたことはどうあつても変えられない。

ならばせめて、これからも前線で戦うであろう仲間たちをもっと近くで支えられるよ

うに、力が欲しい。

その思いが、ユーノにムラサメを握らせた。

強くなるために、ユーノは考えつく限りのことをしてきた。

無限書庫の蔵書の中から剣術に関する資料を集め、頭にありつただけの知識を叩き込んだ。

肉体のトレーニングに加え、ミッドチルダで人のいない区画に結界を張り、無限書庫で得た知識を実践しながら独自の戦闘訓練を積んだ。

魔法に関しては新たに攻撃魔法を習得するのではなく、自分の得意とするサポート系の魔法を戦闘に応用することで、扱いやすい攻撃手段を編み出した。

結界魔導師である自分には、自ら前線に出て敵陣に切り込むような戦い方は適さない。

自分が刀を使うとしたら、仲間の攻撃を回避し接近して来た敵に対処する時だろう。

そうして実際に自分が戦うあらゆる状況や敵を想定しながら、ユーノは自分に適した防御主体の戦法を作り上げていった。

強くなりたい。仲間たちと肩を並べて戦えるようになりたい。

ただそれだけを思い、ユーノは我武者羅に自分を鍛え続けていった。

しかし――

「ある時、思ったんです…僕が強くなって、何か意味があるのかなって」
「…それは、何故だ？」

これまで話していた自分の過去を否定するかのようなユーノの言葉に、シグナムは少し動揺した。

語るユーノの表情からは、ひどいやるせなさが感じ取られたのだ。

「なのはたちが模擬戦をする時、何度か僕が結界を張ってましたよね」

「ああ。お前のおかげで、私たちは心置きなく全力を出せる。お前には感謝しているよ」
「…そうですね。皆、僕の結界の中で全力全開で戦ってました。それこそ、訓練室を破壊しかなない勢いで」

「皆がユーノの結界を信頼している証拠だ」

「それは、とても嬉しいんですけど…僕は皆に内緒で鍛え続けて、自分の強さにある程度自信をつけたつもりでした。でも、皆の全力を見て思ったんです。僕は皆と肩を並べられるほど強くはなれないだろうって」

語っている内に、ユーノは次第に顔を俯かせていった。

「今まで司書としてサポートに徹していた僕が、今更自分を鍛えたところで皆に追いつけるわけがない。同じ場所に立てるわけがない。そう考えると、なんだか必死になつて自分がバカみたいに思えてきて…情けないですよ。勝手に自分を追い詰めて、勝手に訓練して、勝手に諦めるんですから」

自嘲するように、歪な笑みを浮かべるユーノ。

それに対して、シグナムは眉間にしわを寄せ、唇を強く噛みしめていた。怒りや悔しさが入り混じったような表情だ。

シグナムは自分を落ち着かせるように一呼吸してから、言葉を発した。

「腹立たしいな」

「…そうですよね。僕も、こんな自分が情けなくて…」

「違う。私自身のことだ」

「え？」

意外な発言に思わず素で反応したユーノ。
てつきり自分に対して怒っていると思っていたのに。

「私が結界を頼む度、ユーノは苦しんでいたんだろう？ 将でありながら仲間の心中を察することが出来なかった自分が腹立たしくて仕方がないのだ！」

「そ、そんな…僕が勝手に落ち込んでただけで…」

「ならば、私が自分に腹を立てるのも私の勝手だ。違うか？」

「そ、そうですけど…」

思いもよらない展開になって、戸惑い始めるユーノ。

シグナムはそんな彼の様子に一瞬微笑を浮かべたが、すぐに真剣な表情に切り替えて言った。

「諦めるのは早いぞユーノ。お前はまだ14歳だ。今後の訓練次第でもっと強くなれる」

「…でも僕の力は皆には及びません。それなら、これまで通り無限書庫で…」

ユーノが無敵書庫で調べた情報は、様々な事件の解決に貢献している。前線に出るよりも、無敵書庫から後方支援を行う方がユーノの能力を十全に発揮できるだろう。

「確かにお前の能力は戦闘向けではない。だがそれでも、より強くなりたいと思うことは何も間違っていないぞ」

「…そうでしょうか？」

「そうだとも。私もそうなのだからな」

「…シグナムさんも？」

「当然だ。私は今の自分の強さに満足などしていない。主はやてを守り、仲間たちと共に戦い、テストアロッサと決着をつける。そのための精進を怠ったことはない」

騎士としては既に完成していると言えるシグナムでさえ、更に強くなろうとしている。

ユーノは常に上を目指す彼女の姿勢に驚嘆すると同時に羨ましく思えた。

自分も彼女のように強くなりたい。

諦めずに強くなりたいと。

「ユーノ。今までお前が鍛え上げてきた力が、今日お前の身を怪物たちから守ったのだ。お前がしてきたことは決して無駄ではない」

「…なら、僕はどうすればもっと強くなれますか？」

ユーノの問いを受けて、シグナムは昨晚デミオから言われたことを思い出した。

ユーノは他人に頼ることが苦手である、と。

そんなユーノが、今シグナムを頼って問い掛けてきている。

それを嬉しく思いながら、シグナムは答える。

「簡単なことだ。お前は今まで、たった一人で訓練をしてきたろう。だが一人で出来ることなど、たかが知れている。もっと誰かを頼れ」

「誰かを…」

「いるだろうか？少なくとも一人、お前の目の前にな」

シグナムは微笑みながら、待機状態のレヴァンティンを取り出した。

「私とお前では戦い方も求められる能力も違う。だが共に訓練していけば、多少は為になることがあるはずだ」

「いいんですか?」

「共に鍛錬することでお前がどこまで強くなれるのか、興味がある。それに、鍛錬は一人でしていてもつまらんだろう?」

言われて、ユーノは思い出した。

最近まで一人で淡々と行っていたトレーニングが、シグナムと一緒にやり始めてから楽しいものになっていったことを。

そして今度は、戦闘訓練にも付き合ってくれるという。

例え強くなれたとしても、ユーノはまだ無限書庫を辞めるわけにはいかない。

資料検索の他、未整理区画の調査や新任司書の育成など、ユーノが為すべきことは山のようにある。

だから、戦闘訓練はほとんどユーノの我が儘のようなものだ。

それでもシグナムは、ユーノの成長を見るために彼に付き合うつもりだ。

それがとても嬉しくて、ユーノは笑みを浮かべて言った。

「師匠って呼んでもいいですか？」

「…やめておけ。私は師なんて柄ではないからな」

テントの中、二人の笑い声が響いた。

二人の剣士

——新暦72年 某日——

ユーノは管理局本局内にある訓練室にて、友人たちと集まっていた。

彼の他にいるのは、なのは、フェイト、アルフ、クロノ、ヴィータ、そしてシグナム。かつて地球・海鳴市で起きた『PT事件』、『闇の書事件』といった二つの事件を解決した仲間たち。その一部のメンバーである。

この日の夜、クロノとこの場にはいない仲間の一人であるエイミイの結婚前祝いとして、仲間たちを集めたパーティーが行われる予定だ。

この場にいるメンバーはこの日に休暇を取れた面子だが、パーティー参加者の全員が完全な休みを取れたわけではなく、この場にはいない面子は昼間の仕事や用事をこなしているところである。

そして、せつかく夜まで時間があるということ、集まれるメンバーで訓練をしようという流れになり、今に至る。

休日にまで訓練なのかとやりたいが、司書長であるユーノや使い魔であるアルフを除くメンバーは全員が前線で戦う戦闘魔導師たちである。

機会があれば訓練、となっても仕方ない。

訓練参加者全員がバリアジャケットを纏ったところで、フェイトは早速ライバルであるシグナムと模擬戦をしようとしたが、シグナムは少し思案してからこう言った。

「テストアロツサ。提案だが、今回は二対二で行わないか？」

「二対二で？」

仲間内で模擬戦を行う時は参加者全員を二チームに分けて対決するか、一対一で行うパターンがある。

フェイトとシグナムの場合は長年の決着をつけるという意味合いもあって、一対一で戦うことが多かったが、それだけにシグナムがタッグマッチを提案したのはフェイトにとって予想外だった。

とは言え、たまにはそれもいいだろうと思ったフェイトは、その提案を受け入れた。

「シグナムは誰と組む？ ヴィータと？」

「いや、私は…」

同じヴォルケンリッターであるヴィータと組むのかと予想したフェイトだったが、シグナムはそれを否定すると――

「ユーノと組む」

「え?!？」

シグナムらの傍で、なのはたちと談笑しながら模擬戦用の結界を準備していたユーノの肩をつかんだ。

なのはたちと話しながらもフェイトとシグナムの会話を聞いていたユーノだったが、予想外の指名に思わず変な声を出してしまう。

「ちよ、ちよつとシグナムさん?!いきなり過ぎますよ!」

「別にいいだろう。修行の成果を見せるいい機会だ」

「ユーノ君が修行?」

抗議するユーノにあっけらかんと言つてのけるシグナム。

一方でなのは含む周りのメンバーは、無限書庫勤務で戦闘とは余り縁のないユーノと修行というワードが結びつかず、首を傾げている。

そんな彼女らに、シグナムが説明した。

「ここ二年ほど私とユーノは一緒に戦闘訓練をしていたのだ。無論、暇が合う時のみだが」

「へへ。一緒にトレーニングしてるのは知ってたけど、戦闘の訓練までしてたのかよ」
「…私、ユーノ君とシグナムさんが一緒にトレーニングしてたのも知らなかったよ…」
「私も…」

八神家の食卓にてトレーニングのことを聞いていたヴィータは納得している様子だったが、トレーニングのことすら知らなかったなのはやフェイトは驚きを隠せずにした。

「いや、でも僕は…」

「ならフェイトの相方は僕がやろう」

「ク、クロノ!？」

ユーノの発言にクロノが割り込んだ。

彼は既に自身のデバイスであるデュランダルを起動させていた。

「思えば、最後にお前が模擬戦に参加してからずいぶん経つ。その間訓練していたというなら、今の力がどんなものか興味があるからな」

と、本人はかなりノリノリな様子だった。

普段は模擬戦に熱中しすぎる他のメンバーに呆れてるけどこいつも大概だな、とユーノが内心愚痴るのを置き去りにして、結局そのまま模擬戦が行われる運びとなった。

訓練室の中央で向き合うように立つユーノとシグナム、クロノとフェイトに、審判役となったのが声をかける。

「じゃあ、これからフェイトちゃんとクロノ君チーム対ユーノ君とシグナムさんチームの模擬戦を始めます。ルールは相手チーム二人を撃墜した方の勝ち。両チームともいいね?」

「うん」

「問題ない」

「…はあ」

「おい、審判に溜め息で返事をするなフェレットもどき」

「うるさいよシスコン提督」

一瞬、ユーノとクロノの間で火花が散ったように見えたが、気のせいだ。

「どうしたユーノ。そのように消沈しているは戦いには勝てんぞ」

「自分が原因だって分かっています？」

隣に立つシグナムに、不満たらたらといった表情でユーノは言った。

そもそもユーノとしては結界役のつもりで来たのであって、模擬戦に参戦する気はなかった。

無限書庫勤務である自分が戦闘訓練をしていたという事実が知られば、仲間たちに無用な心配をかけるかもしれないと思っていた。

まあ実際のところ、話を聞いた全員が興味津々といった状況となったが。

「いいではないか。訓練で身につけた実力を目の前の悪友に見せつけてしまえば」

「そうは言いましても…」

「かく言う私も、お前との訓練の成果をテストアロツサに見せたくてな。見せるならお前と一緒にいいと、ずっと思っていた」

そう話すシグナムは、まるで誕生日のプレゼントが待ちきれずにウズウズしている子供のような笑みを浮かべている。

彼女の表情と言葉を受けたユーノは呆れと諦めの溜め息をつきながらも、どこか嬉しそうに腰のポーチから待機形態のムラサメを取り出した。

「仕方ないですね…付き合いますよ、師匠」

「…師匠ではないと、いつも言っているんだがな」

シグナムの返しにまた笑いつつ、ユーノはムラサメを起動させる。

鍰のみだったムラサメに柄と刀身、鞘が形成され、それに合わせてユーノのバリアジャケットが陣羽織を模したムラサメ用のジャケットに変わる。

「刀？意外な武器を使うね」

「ユーノの攻撃力不足を補おうってわけか」

『防御に優れるユーノが攻撃もして来るか…厄介だな』

『うん。流石にシグナムほどではないだろうけど…』

刀型アームドデバイスという、ユーノのイメージからかけ離れた武器の登場に驚くアルフとヴィータに対し、クロノとフェイトは冷静に念話で話し合っていた。

過去にユーノが戦闘に参加した時、彼は基本的にサポートに徹していたが、それがいざという時に攻撃もして来るとなれば対策も大きく変わってくる。

準備を整えた両チームが空中へと上がる。

なのはは左手を頭上に向けて伸ばし――

「じゃあいくよ。レディー…：ゴー！」

手を振り下ろし、模擬戦開始の合図を送った。

その直後、クロノとフェイトは各々の攻撃術式を展開。

ユーノとシグナムに向けて同時に放った。

「ステインガールレイ！」

「プラズマランサー！」

蒼の魔力弾と金色の雷槍が、空を切りながら標的へと迫る。

しかしその標的である二人には回避行動をとる様子もなく、ユーノがシグナムの壁になるように前に出た。

「ラウンドシールド！」

正面にかざした右手に、翡翠色に光る円形の盾を出現させる。

ミッド式防御魔法の基本と言えるそのシールドは、結界魔導師であるユーノによって強固に構築され、襲いかかる魔力弾と雷槍を完全に防いだ。

（やはりそう簡単には破れんか……！）

貫通力に優れたステインガーレイでさえ容易く防がれ、クロノは歯噛みする。

直後、ユーノの背後にいたシグナムがラウンドシールドを飛び越えてクロノとフェイトに急襲する。

「フェイト！」

「任せて！」

フェイトはバルディッシュを鎌型のハーケンフォームに変形させ、シグナムを迎え撃つ。

数年に渡って共に戦ってきた兄妹は、もはや言葉を交わさなくとも意思疎通が出来る。
いた。

先制攻撃を防がれた二人が次にとった行動は、ユーノとシグナムの分断だった。

現在のユーノの能力は未知数ではあるが、一対一に持ち込んで連携を封じれば自分たちが優勢になると考えた。

狙い通りフェイトがシグナムと互いの武器をぶつけ合いながら離れていく間に、クロノはユーノへと向かって飛ぶ。

遠距離からの魔力射撃ではユーノのシールドを貫けないが、ユーノの得物が刀である

なら真つ向から接近戦を挑むのは危険である。

クロノは自身の周囲に魔力刃ステインガーブレイドを五本形成し、発射した。

防御にせよ回避にせよ、ユーノが魔力刃に対処しようとすれば隙が生じると考えての牽制だった。

しかし、ユーノはクロノの予想に反した行動に出る。

ラウンドシールドを出現させた右手を振りかぶると、シールドが回転し始めた。

「ラウンドスピナー！」

「なっ…!?!」

大きく振るわれたユーノの右手から、回転するシールドがフリスビーのように投擲される。

クロノの放ったステインガーブレイドは、シールドに接触した瞬間に真つ二つに切断された。

ラウンドスピナーと名付けられたそのシールドは、エッジ部分が魔力刃になっていたのである。

強固なシールドを応用した思わぬ攻撃に目を見開きながらも、クロノはラウンドスピ

ナーをすんでのところまで回避する。

直後、クロノは咄嗟にデュランダルを盾にするように構えた。

訓練室に金属同士の鈍い激突音が鳴り響く。

クロノの正面には、鞆に納めたままのムラサメを振り抜いたユーノの姿があった。

「隙あり……と思っただけど、流石だね」

「肝を冷やしたがな……」

クロノがラウンドスピナーに一瞬気を取られた隙に、間合いを詰めたユーノは高速の一太刀を浴びせようとした。

それを直感で防いだのは、歴戦の魔導師であるクロノのなせる業だろうか。

クロノはデュランダルでムラサメを抑え込みながら、その矛先をユーノの胸に突きつける。

デュランダルの矛先には、既に魔力が収束されていた。

「この距離ならシールドは張れないだろう！」

《Blaze Cannon》

デュランダルの音声と共に、魔力砲が発射された。

砲撃の光と、直撃による魔力爆発がユーノの姿を掻き消す。

防御に優れたユーノとは言え、零距离で放たれた高火力の砲撃は防ぎきれないと思われたが――

「確かに……シールドは張れないね」

クロノの目の前には、全身に翠の魔力光を纏ったユーノの姿があった。

「パンツァーガイストだど!？」

それは全身に魔力を纏うベルカ式防御魔法。

元々砲撃魔法を防げるほどに強固なその魔法をシグナムから教わったユーノは、術式に改良を加えることでその防御力や魔力効率を向上させていた。

決め手になり得ると思っていた攻撃を防がれたクロノは、ふと自信の胸の前に直径20センチほどのミッド式魔法陣が出現していることに気づいた。

しかし、それがユーノの物であると気づいた時には――

「お返しさせてもらうよ……リパルサーシールド！」

「ぐあっ!？」

胸に触れたシールドと自身の間に発生した強大な反発力により、後方へと弾き飛ばされていった。

「クロノ!？」

シグナムと交戦していたフェイトは、視界の端で吹っ飛ぶクロノの姿を見つけた。

先ほど起きた爆発で、ユーノが撃墜されたかと思っていたが、逆にクロノの方がやられていたとは。

驚くフェイトとは対照的に、シグナムは笑みを浮かべていた。

『やるではないか。ユーノ』

『どうも。でも、長引くと危険ですよ』

『だろうな。ならば仕掛けるぞ！』

ユーノが優勢でいられるのは、クロノがこちらの手の内を知らないから、というのもある。

実戦経験では圧倒的にクロノの方が勝っている以上、戦闘が長引けばそれだけユーノの方が不利になる。

故に、ユーノとシグナムは更なる攻勢に出るのだ。

「行くぞレヴァンティン！」

《Schlange form!》

レヴァンティンの刀身がいくつにも分離し、連結刃形態・シユランゲフォルムとなつてフェイトを狙う。

それと同時に、ユーノは空中で体勢を立て直したクロノに新たな魔法を振るう。

右手に形成した魔法陣から翠の鎖が伸びる。

その鎖の先端には矢尻型の魔力刃が繋がっており、連なる鎖の間にも無数の刃が備わっていた。

「行け、チェーンサーペント！」

翠色に輝く連鎖刃がクロノに襲いかかる。

その動きは、今まさにフェイトを攻める連結刃と酷似していた。

「チェーンバインドを応用して、シグナムの攻撃を再現したのか!？」

魔法で攻撃する手段といえ、射撃や砲撃と言った攻撃専用の魔法をイメージしがちである。

だからこそ、シールドやバインドといった補助魔法を攻撃に応用するユーノの戦術は、クロノたちを翻弄し続けていた。

「ユーノがあんな攻撃まで……」

「驚いたか、テストアロッサ」

「うん。すごいね、シグナム師匠！」

レヴァンティンの刃を持ち前のスピードで回避しながら、ユーノを鍛えたであろう人物を賞賛するフェイト。

「あいつにも言ったが、私は師ではない！」

「え!？」

しかし否定の言葉を放ったシグナムは、フェイトに向かってレヴァンティンの鞘を投げつけた。

魔法による操作もなく、ただ真っ直ぐに飛ぶ鞘など飛行する魔導師に当たるはずがない。

フェイトはシグナムの行動の意味が全く理解できず、思わず声を上げながらも飛来する鞘を難なく回避する。が――

「私も、ユーノから教わった身なのでな！」

そう叫び、シグナムが宙を舞う鞘に向けて左手をかざすと、掌にミッド式の魔法陣が浮かび上がり、紫色の鎖が放たれた。

「シグナムがチェーンバインドを!？」

チェーンバインドが空中の鞘に巻きつくと、シグナムはレヴァンティンと同じように振るった。

レヴァンティンの鞘はそれ自体がシグナムを守る盾になり得る強度を持ち、それは打撃武器としても通用することを意味する。

チェーンと繋がることで、鞘は鎖分銅へと姿を変えたのだ。

右手に連結刃、左手に鎖分銅。

手数を増やしたシグナムの怒涛の連続攻撃を、フェイトは必死に回避していく。

本来は単に相手を拘束するだけのチェーンバインドを自由自在に操る技術は、ユーノから伝授されたものだろう。

「確かに、師匠っていうのは違うか…」

なぜシグナムが師匠という呼び名を嫌うのか、フエイトは理解した。

シグナムがユーノに教えていただけではない。二人は互いに自分の技を教え合い、共に精進してきたのだ。

「フエイト！」

「え、クロノ!?」

呼ばれて振り向けば、すぐそこにクロノの姿があつた。

ユーノとシグナムを分断するためにある程度距離を置いていたはずだが、回避行動を取っている間にここまで近づいていたのだ。

いや、誘導されていた、と言う方が正しいだろう。

「おおおおお!!」

シグナムはクロノとフエイトに向けて、連結刃と鎖分銅を大きく振るつた。

左右から迫る挟撃を、クロノとフエイトは上昇することで避ける。

しかし、既に罠が仕掛けられていた。

「封縛結界！」

クロノとフェイトは、ユーノが作り出した球状の結界に閉じ込められ、さらに全身の動きを封じられる。

「何!?!」

「バインド? いや、結界か!?!」

「両方だよ」

不敵に笑いながらユーノが返す。

クロノとフェイトは拘束を解除しようとするが、結界を得意とするユーノの術式がそう容易く破壊できるわけもなかった。

「ユーノ！」

「はい！」

封縛結界を中心に、シグナムとユーノは対角線上の位置につく。

シグナムのレヴァンティンは紫の炎を燃え上がらせ、ユーノのチェーンサーペントは翠の輝きを増していく。

そして、互いの魔力が限界まで高まった時――

「双竜烈閃!!」

二匹の蛇は、炎と光を纏った竜となり、捕らわれた獲物に牙を向く。そして獲物たちは、自らを縛る結界諸共、竜の餌食になった。

「はあく……疲れた」

飛行魔法を解除し、床に降り立ったユーノはその場に座り込んだ。

クロノとフェイトがユーノとシグナムによる合体魔法の直撃を受けて撃墜されたことで、模擬戦はユーノたちの勝利に終わった。

終了直後に脱力したユーノに、シグナムが話しかけた。

「だらしないぞユーノ。勝利したのだからもっと喜んだらどうだ？」

「そうですけど…次からはこうはいきませんよ。色々見せてしまいましたし」

「一理あるな。だが…」

「ユーノ君！」

シグナムが何か言いかけたタイミングで、なのはが声をかけてきた。

傍にはフェイトとクロノ、ギャラリーだったアルフとヴィータもいる。

「びっくりしたよ！ユーノ君あんなに強くなってたなんて！」

「同じサポート役だってのに、大分差つけられちゃったねえ」

「つーか強くなりすぎだろ。どんな訓練してたんだ？」

「シグナムも技が増えてたし、ユーノもまだ何か隠してそうだし、これは気が抜けないね」

「まさかお前に撃墜される日が来るとはな…次はないが」

詰め寄ってくる仲間たちにユーノは返事ができずにいた。

言葉は人それぞれだが、その場にいる全員がユーノの力を認めたのだ。

かつてたつた一人で強くなろうと足掻き、しかし絶対に仲間たちに並ぶことはできないだろうと諦めた時があった。

だが今日、シグナムとの共闘だったとは言えクロノとフェイトに勝利し、皆が賞賛してくれている。

今まで心の隅に残っていた当時の悔しさが払拭されていった。

ふと、隣に立つシグナムを見ると、彼女は笑顔でこちらを見つめていた。

「言っただろう。お前は強くなれるとな」

再び強くなろうと決意するきっかけを与えてくれた彼女に、ユーノもまた笑みを返す。

「ありがとうございます、師匠」

「師匠ではないと何度言えば分かる?」

「僕の方がたくさん教わってますし…」

「…比率の問題ではない」

二年間の訓練の中で何度も繰り返した掛け合いが始まるのだった。